

今後の管理について

1) 今後の天候と幼穂形成期について

6月28日気象庁発表の長期予報では、気温は7/7から1週間は低い確率が60%、2週目からは平年並み、3・4週目は回復すると予想されています。また、1ヶ月間の予想では、日照時間は平年並みか少ない確率が、降水量は多い確率が高くなっています。

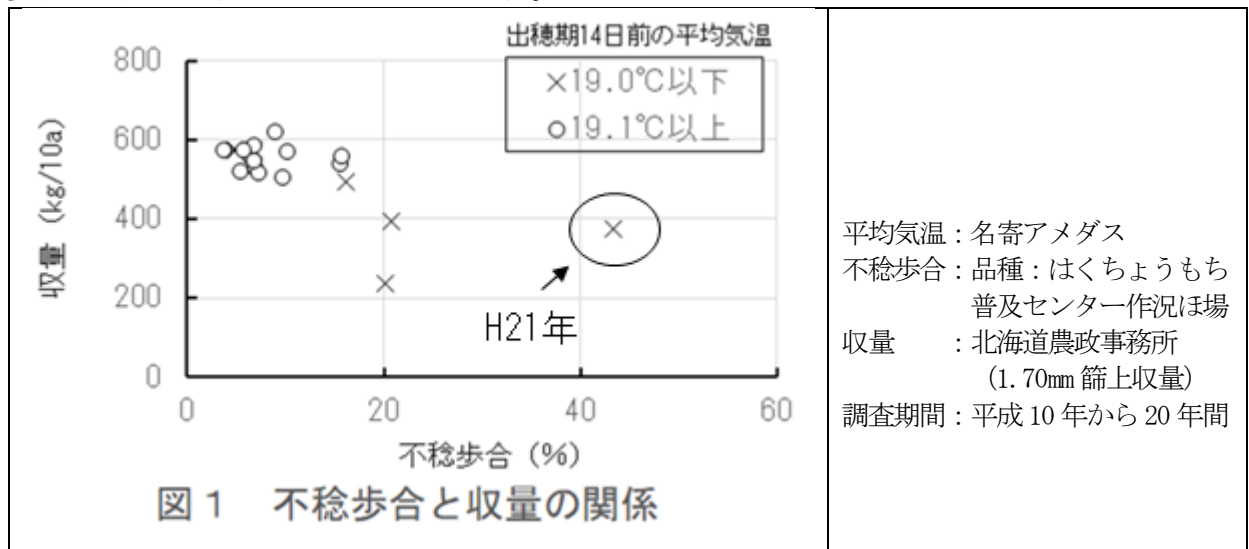
5月20日～5月27日移植の市内23カ所の「はくちょうもち」、「風の子もち」の幼穂形成期を確認したところ、移植日にかかわらず概ね7/2～7/4でした。ただし、主茎の止葉葉数が10枚と11枚が混在しているため、確認が必要です。下記の手順に従って幼穂形成期の確認を行きましょう。

- | |
|---------------------------------------|
| ・ 1株のうち草丈の一番長い茎を採取します。 |
| ・ カッターで基部から開き、幼穂が2mmになっていれば幼穂形成期です。 |
| ・ 節と幼穂の長さが足して10cmになっていれば幼穂形成期後10日後です。 |

幼穂形成期11日目からは、好適な気象条件下でも花粉の数が減少する時期になります。この時期に低温に遭遇すると花粉の数の減少が激しくなり、不稔歩合の多発 ⇒ 収量の低下となります。

特に出穂10日前（過去3カ年では7月20日前後）の低温は、花粉の減少に大きく影響します。冷害危険期終了は全茎が止葉から5cm抽出した日です。

図1は作況ほ場の不稔歩合と農政事務所報告の収量の関係を示したものです。図1のとおり、出穂期までの14日間の平均気温が19℃以下で、不稔歩合の多発・収量の低下となっています。



特に不稔歩合が40%以上であった平成21年は、表1のとおり低温に加えて、多雨・寡照でした。

また、冷害危険期が低温の年は千粒重も軽くなる傾向があります。平成21年の千粒重は19.1g/1,000粒で平年より2g軽く、収量は375kg/10aでした。

表1 平成21年の出穂期直前14日間の気象条件

区分	積算降水量 (mm)	平均気温 (°C)	日照時間 (h)
平成21年	103	18.0	2.9
平年	59	20.4	4.4
平年比	173%	88%	65%

2) これからの水管理について

右の図2は、水深5cmと10cm及び外気温を比較したものです。

深水では日中の水温が上がりにくい反面、夜間の水温が下がりにくい事がわかります。

幼穂形成期10日目までは徐々に深水にして、10日目からは15cm程度の水深を維持しながら幼穂を保護する事により、不稔籾の発生を軽減できます。

現在の水田の水温は高いので、排水せずに現状維持で水位を保ってください。

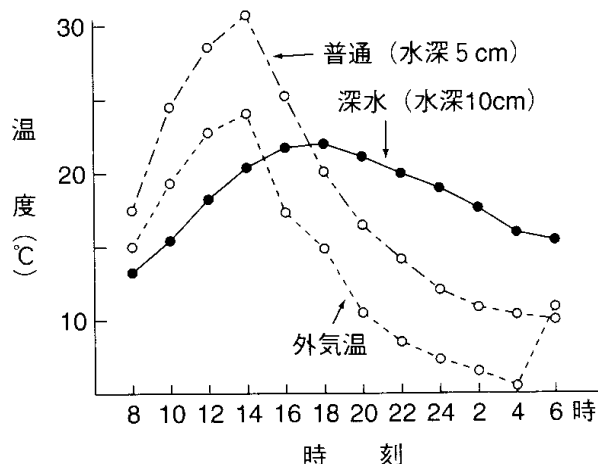


図2 かんがい水の水深と水温（北農試）

低温注意報が出てからの夜間の入水は逆に水を冷たくするため、逆効果で不稔籾が多発します。水温を保ちつつ水深を深くする事が重要です。

水は無限ではありません。下流のほ場にも水が行き渡るように計画的に入水しましょう。

3) ケイ酸の追肥について

ケイ酸は健全な花粉を増やし、不稔籾の発生を軽減する効果が知られています。ケイ酸の追肥は利用率が高く、効果的です。

全層での施用量が100kg/10a以下の場合には追肥を検討してください。

ケイ酸の追肥は幼穂形成期から1週間以内が効果が高く、遅くなればなるほど効果が低くなります。

ケイ酸含有率が高い稲体は葉鞘褐変病の被害も少なくなる傾向にあります。

耐冷性がやや劣る「はくちょうもち」や「ゆめぴりか」だけでもケイ酸の追肥を実施してください。

葉鞘褐変病に罹患しやすい「はくちょうもち」に対するケイ酸の追肥は予防効果も高いと考えられます。